

謎の消滅繰り返す巻き貝、高校生が研究 専門家「ハイレベルすぎ」

会員記事

小坪遊 2021年10月28日 13時00分



岩の隙間にいるカヤノミカニモリ=岡山大学の
福田宏・准教授提供



絶滅の恐れのある「カヤノミカニモリ」という巻き貝の知られざる生態が、熊本県の高校でひそかに解明されていた。専門家から「あまりにもハイレベルすぎる。正当に評価される機会を得ることすら難しい希少な研究だ」と聞いて、調べてみた。

なぞに迫ったのは、熊本県立天草拓心高校マリン校舎(苓北町)の科学部の生徒たち。2013年から代々、カヤノミカニモリの研究を続けている。現在の部員、2年生の野田心優(みゆう)さんにとっては「毎日研究している、身近な存在」だという。

この貝は、殻の長さが2センチ弱で、オニツノガイ科というグループの種の一つ。環境省のレッドリストでは、準絶滅危惧種とされる。野田さんが「身近」という通り、高校から数分の海岸には「大量に群生する」そうだが、熊本県のレッドリストでも絶滅危惧Ⅱ類。四国や本州の各地では、絶滅か激滅しているとみられ、実際は危機的状況にある。

だが、詳しい生態は不明だった。この貝を守っていくのに必要な、基礎的な情報が欠けていたのだ。

それを、生徒たちは飼育に取り組んで産卵や生育の過程を次々に解明。過去の文献には「肉食」とあったが、藻類を食べることも突き止めた。19年には卵から幼生、若い貝まで成長させることにも成功した。野田さんは「今の状況があるのは、先輩たちの研究のおかげ。感謝しています」と話す。

貝類の分類学者として知られる福田宏・岡山大准教授は、一連の研究内容を「何から何まで驚きに満ちている」と評する。オニツノガイ科全体でも、飼育下での生態の解明はまれだという。なかでも、カヤノミカニモリは「集団が原因不明の消滅を繰り返すなど、動向が予測できない種」で人工的に産卵や成長を記録することは、まず不可能と考えていたそうだ。「これは国際誌に堂々と発表されてしかるべき、超絶的に優れた研究だ」と断言する。

記録を調べると、科学部の研究は、地元などで時折表彰されたり、学会の高校生部門で発表されたりしていたようだ。いずれも環境活動や環境学習としての評価に見えた。筆者が知ったきっかけは、活動が環境省の今年度の「地域環境保全功労者表彰」に選ばれたという、地元紙のネット記事だった。最初の個人的な受け止めは「高校生がよく頑張っているな」という程度だった。

しかし、同じ記事を目に留めた福田さんは「これは大変なことだ」と感じたという。研究を続けてきた科学部はもちろんのこと、表彰した環境省も、取り上げた地元紙も「ファインプレーだった」。

取材を進める中で「大変さ」がだんだん分かってきた。絶滅する恐れのある生物の、専門家ですらあきらめていた生態の解明。保全にも直結する貴重な知見で、これは「高校生が頑張った」といった枕ことばも不要な、科学として重要な成果だ。

2年生の石原綾乃さんは「他の地域の個体とDNAを比較してみたい」と今後の抱負を語る。さらに、ヤドカリと一緒に育てた場合と、カヤノミカニモリだけで育てた場合の違いなども調べるという。「図鑑にもあまり載らないような貝のことを知ってもらって、他の絶滅危惧種についても関心を持ってもらえたらうれしい」と話す。

このような、目立たないけれども重要な研究は各地で続いているに違いない。埋もれさせるのはもったいない。専門家たちをも「あっ」と言わせるような成果が、全国から次々に報告され、正当に評価され、そして保全にいかされて欲しいと思う。(小坪遊)

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.